

公益財団法人 松園尚己記念財団

My graduation 2022

## T.F

大学教員

神戸大学大学院 人文学研究科 博士課程後期課程卒

文学研究という進路をより具体的に検討し始めた博士後期課程の3年間は、貴財団の支援により、より充実した研究活動が可能となった。昨今の人文学研究を取り巻く社会からの風当たりには厳しいものがあり、研究への意欲があったとしても学生への支援が手薄なため、書物の購入や学会への参加などに必要な経費を自分で賄わなければならない場合も多い。学位を取得したとしても就職の道が必ずしも開かれるとも限らないが、上記のような心配事に翻弄されず博士論文執筆に専念でき、大学院修了から間を空けずして常勤職を得ることができたのは本当に幸運なことだと思い、感謝の思いでいっぱいである。

思い返せば、学部時代には英語に関連する言語学、コミュニケーション学、文化・文学分野などを幅広く履修し、英語の運用能力を鍛えた。それを活かして海外旅行や留学に行くなど充実した学生生活ではあったが、将来の道筋を漠然としか考えていないままに研究の道を志すようになった感覚は拭えなかった。同時に東日本大震災後の、社会がまだどことなく落ち込んでいた時期の学部生活では、私自身の長崎という出自と相まって、世の平和や安定を願う気持ちが強くなったと感じる。そんな中で大学院にまで進学し英語文学を専攻しようとするのは時代錯誤的に思えてしまうこともあった。けれども、いつも気持ちのどこかで文学には個人や世界を変えることのできる計り知れない力があるに違いないという「信仰」のような思いを抱いていた。

私が大学院で中心的に研究してきたのはアメリカやカナダの日系人たちによる英語文学である。第二次世界大戦時には、彼らの多くが土地や財産を没収され、砂漠地帯の強制収容所へと送られて自由のない生活を強いられた。国籍を有しているにも関わらず主流社会から疎外され差別を受けた彼らは被害者でもありつつ、当時の日本側からしてみれば政治的な戦争加害者とも捉えうる。また日系人コミュニティの内部でも、世代間のすれ違いによる葛藤が描かれる。自分は一体何者なのかというアイデンティティの問題や、なぜこのような目に合うのかというやるせない気持ちや怒りの感情が彼らの作品の中から伝わってきた。そのような作品のうちの一つ、日系カナダ人作家 Joy Kogawa (1935-) の1981年の小説 Obasan (邦題は『失われた祖国』)はカナダの戦後日系人補償請求

運動の一大推進力として働き、実際にカナダ政府は 1988 年に、日系人たちへの謝罪と補償を決定した。これは、先述した文学に対する「信仰」を確信させられるエピソードの一つである。

さて、文学という媒体を通して表明された作家の信念を読み取ってきた私は、これから研究者・教育者として大学で働いていくことになる。その中でいつも大切にしていきたいことは、やはり言葉を大切にすること、そしていつも開かれた心を保つ努力をすることである。他者との共感の鍵となるのは、種々のコミュニケーションであり、文学を専門にする者としてどのような形であれ、言葉の持つ作用に注意を払っていきたい。様々な背景を有する学生たちとの間でも、いつも歩み寄りの姿勢を忘れず、個を損なわない教育活動を心がけていきたいと思っている。貴財団の寛大な支援により開かれたこの道を当然とは思わず、培ってきたものをこれからの社会に還元し、またより良い個人としても成長できるよう努めて参りたい。